

視察報告書 町田市議会無所属会派 吉田つとむ 2024.2.8 提出

香川県内 3 か所視察 2024.1.31-2.1 実施 2月1日分の1
「東かがわ市立白鳥小中学校における英語教育」視察報告

概要

東かがわ市立白鳥小中学校における英語教育を視察しました。

町田市でも英語教育に取り組んでいる学校がありますが、視察をしたことが無く、楽しみでした。また、小中学校が一貫校となっている形態にも興味があります。その双方がどのような形で連携を取る形か、あるいは、校舎施設も一体なのかに関心がありました。また、小中一貫ということで、特に六七年時の動きに関心がありました。

東かがわ市は香川県の東の端にあり、平成 15 年 4 月 1 日に引田町・白鳥町・大内町の 3 町が合併してできた平成の大合併の中で新たにできた都市です。議会が合併特例を使わず、解散して定数を減らして意欲的にスタートした自治体です。その後、人口が減る過疎化が進み、学校再編が行われました。

人口 28,279 人 (男 13,358 人 女 14,921 人) 11,931 世帯、(令和 2 年 10 月 1 日現在: 国勢調査) と市の資料にあり、面積は 152.86 平方キロメートルあり、町田市の倍ほどの面積です。

その後に学校統合が計画的に進められ、旧引田町、白鳥町、大内町内に、小中一貫の学校を順次開設し、それぞれ同じ敷地の中に 3 校が設置されました。小学校からの英語教育に特徴を持たせ、設備や人員を配置し、そのためのカリキュラムが設定されていました。今回は、その中で、東かがわ市立白鳥小中学校を訪ねて視察をしたものです。



白鳥小中学校の案内図



清溪セミナーの有志議員で視察

学校規模は、1 年生から 9 年生まで全部が 2 クラス編制でした。特別支援学級は 5 クラス (6 年生まで)、及び 3 クラス (7 年-9 年生) でした。

カリキュラムを見ると、朝の会、朝の活動からスタートしており、出校が午前 8 時となっていました。その分、終業は 15:25 (小学校)、15:30 (中学校) とされていました。

また、給食の時間は 12:10-12:50(小学校)、12:15-12:50(中学校)とされ、昼休みは 12:15-12:50 (小中学校共通) で、たまたま給食の搬入状況を見かけましたが、調理は自校方式ではセンター方式となっていました。



中学校の有岡統括校長先生



小学校の笠石校長先生

小中学校一貫の9年生の体制ですが、小学校と中学校の入り口が異なっており、2棟の建物が廊下でつながっていました。パンフレットによれば、階数で小中学校が分かれていました。また、屋内体育館も別にあり、大アリーナと小アリーナに分かれていました。これは小中学校で使い分けていると聞きました。

英語教育では、小学校でも英語専科の教員と専任の「ALT（外国語指導助手）」が配置され、中学校では英語教科の教員が3名、「ALT」が外国人2名で外国語指導主事となっていました。

また、小学校では、英語教育では、外国語教室が使用されていました。



所感

視察には、教育長もあいさつに来ていただきました。複数自治体の議員視察ということで、特に対応されたものでしょう。



小学校でも英語を専科の先生から習うことになっており、各学年では低1中2高3時間のカリキュラムが設定されていましたが、こども園では4歳児、5歳児を対象に、年6回の英語活動を行い、小学校の英語教育に備えているという説明でした。

視察を行ったのは、5年生でした。後列から見学していますが、ペーパーに記入する際には、そばで見せていただきました。服装は男子が詰襟に半ズボン、女子がセーラー服でした。若干異なる服も見かけましたので、完全指定ではないのかも知れませんが、あえて尋ねませんでした。

視察をしたのは、小学5年生でした。

低学年から外国人の教師（「ALT（外国語指導助手）」）も入るということでしたが、さすがに流暢で、英語専科の教員との説明のバランスがスムーズでした。この日は、日本文化を説明する内容のものでした。教材では、児童はキーボード付きのタブレットを使用していました。尋ねると、1年次から、そのタイプが配布されるとのことでした。授業では電子黒板が多用され、教員がその操作に慣れていることが良く分かりました。ALT（外国語指導助手）の教員は、プレートを多用していました。そのため、黒板（教室は白版）を使って書き込みことは少なくなっていました。

授業では細かく時間設定をしながら、児童に質問を重ねていき、ある時は問いかけをしながら、その返答を求めましたが、もちろん、日本語を使う場面はごく一部でした。



右手が英語専科教員、左手がAJT教員



ペーパーに答えを記入した児童が手を挙げる

<東かがわ小中学校のクラス定数は、全学年とも 30 名でした>

上の写真を見ると、先生が生徒の席を回り、ペーパーの内容を見て回っています。1時間の授業の中で生徒の学習理解を把握するか大きな課題ですが、英語の場合は児童・生徒のフォローが欠かせないと思いますが、クラスの定数が最大 30 名となっており、5 年生ではマックスに近い 2 クラス合計で 57 名でしたが、「ALT (外国語指導助手)」の先生と連携をとって、スムーズな授業が進行していましたが、これが 1 クラス定数 40 名だとどのような授業光景になるか、先生が手一杯の中でクラス、児童・生徒個人をも把握することになり、十分な目配りは難しかろうと推測しました。



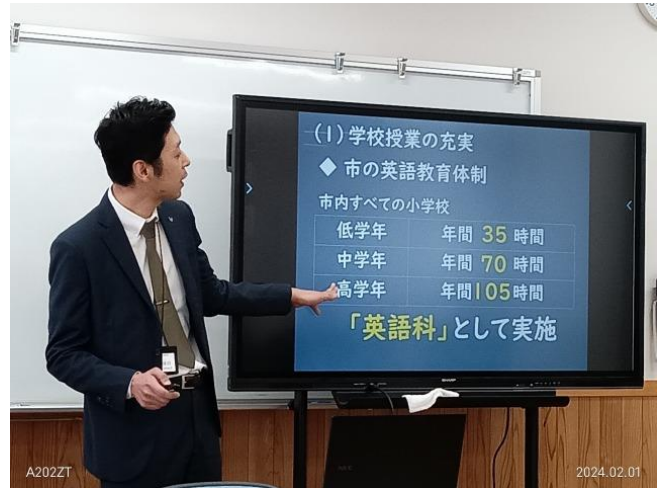
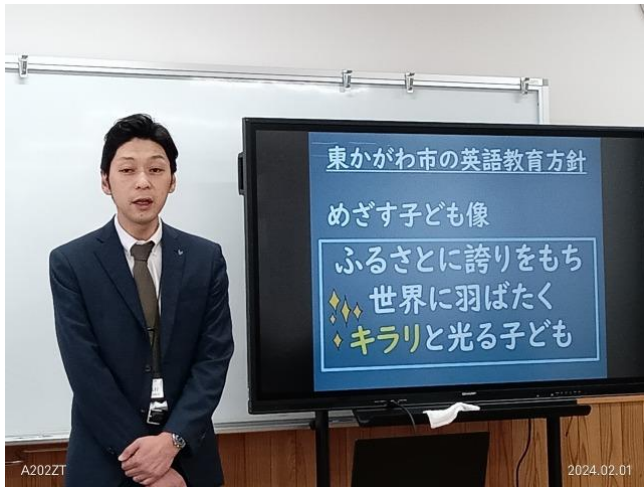
校舎敷地に隣接して、広い盛り土状の場所にグラウンドが整備されていました

東かがわ市では、英語教育そのものより、英語教育を通じて、「国際化に対応できる能力や考え方、態度」を作ること为目标にしているというものでした。

もちろん、東かがわ市の英語教育の達成水準は、香川県の平均、全国の平均をかなり上回っていました。決して、全国トップというものではないとも付け加えがありました。

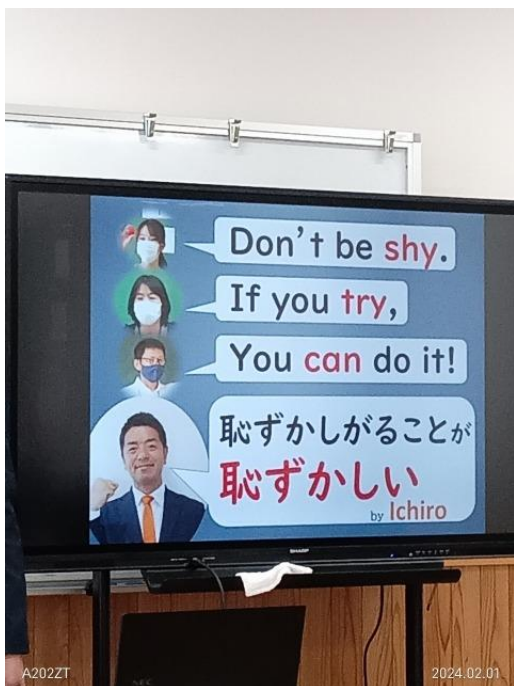
小学校のスピーチでは、中学校の先生が評価を与える方式を採用し、また、中学生が小学生に英語の本の読み聞かせを行うことも取り入れているということでした。

英語専科の教師の存在の意義が大きく、6 年生では全児童を対象に GTEC (英語 4 技能検定) = 「読む」「聞く」「書く」「話す」の 4 技能をスコア型の絶対評価で測定を行っているとのことでした。また、中学生には希望者全員に、実用英語技能検定 (公益財団法人 日本英語検定協会) を行うため、市内準会場を実施しているというものでした。*東かがわ市が、細長い香川県の東端にあって、大都市から離れていることのハンディを教育委員会がその障壁をなくすために行っているとの説明でした。



具体的なことで、学習テンポについていけない子、幼児の英語専門教室の子などにはどのようにしているかと尋ねると、英語学習を低学年時に開始する、カリキュラムを研究するということで、上記のように、こども園での英語活動を導入しているのは、英語をスムーズに学べるようにするための一環であるとのことでした。

また、タブレットの利用では、こどもが書いた記事をアップできることにしており、児童のタブレットの使用頻度を高める狙いがあるようでした。また、1年生からキーボード付きタブレットを渡すことで、ブラインドタッチを教えるように進めているとのことでしたが、全部がうまくいっているわけではないとのことでした。私自身は、長年パソコンを使っていますが、ブラインドタッチを習得していません。



東かがわ市の市立学校の全部が小中一貫校となっており、小中学校とも3校の編成となっています。通学は、小学校が徒歩とスクールバス、中学校では徒歩、自転車、スクールバスを利用することができます。そのため、中山間地の児童・生徒の通学も支障が無いものと思われました。町田市の学区編成では、そうした考慮とはかけ離れた通学時間設定を実際には検証せずに、徒歩と路線バスの利用で済ませようとしています。



令和6年度の中学生のオーストラリア語学研修 学習の成果の数値

話を戻して、東かがわ市の市立学校の英語教育では、「物怖じしない子になるようにしている」というものでした。その考えの発端になったものは、先人が海外に出て先進技術を学び、地元産業に生かした例を紹介されました。それは、手袋産業を海外に学び、産業を起こす、幅広く海外に輸出をする、さらに海外に工場進出をしていくというプロセスを通じて、現在の「国際化に対応できる能力や考え方、態度」とつなげられていました。